

令和5年度 自己評価計画書 R5.4.1

石川県立ろう学校

重点目標	具体的取組	主担当	現状	評価の観点	実施状況の達成度判断基準	判定基準	備考
1 授業改善	①日本語獲得やICT活用等の視点で様々な発達段階から協議し授業改善を行うことで、聴覚障害教育の専門性を高め、センター的機能の充実を図る。	○研究研修課	本校は幼稚部から高等部まで幅広い年齢層の幼児児童生徒が在籍しているため、学部間で一貫性・系統性をもって、授業づくりを行うことが課題となっている。さらに本校のセンター的機能充実のために個々の教員が聴覚障害教育の専門性を高めることも求められている。これまでは手話やオーディオロジーに関する研修を行うとともに、学部の実態に応じた部研究を行い、年度末に各部の取り組みを発表し合うことで、今後の指導の参考になるようにしてきた。一貫性・系統性を確立するためには、幼児児童生徒の実態、指導内容、指導方法を共有し、各教科の目標や内容及び発達段階や生活経験などを踏まえて指導することが重要である。新学習指導要領に沿って意欲を高め、思考を促す授業をめざすために、単元構成や発問や板書の工夫、授業の中での言語指導等の授業の視点について共有し授業改善につなげたい。また、ICT端末の有効な活用についても検証したい。	【成果指標】 ・学部を超えて授業研究を行うことで、自分の授業づくりに繋げることができた。	授業づくりに繋がれたと思う教員が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	CまたはDの場合は、改善策を検討する。	7月及び1月に調査 教員(幼、小、中、高)
		○ICT推進委員会	さらに、本校のセンター的機能の充実については、専門相談員だけが担うという考えではなく、学校全体の課題であることから、個々の教員がセンター的機能の責務を担っていることを意識しながら専門性の向上に向けて取り組んでいくようにしたい。	【成果指標】 手話やオーディオロジー、及び本県の難聴児の早期支援の流れや卒業生の状況などの研修を通して、本校のセンター的機能の向上の責務について自分も一端を担っていることを意識することができた。	本校のセンター的役割を自分も担っていることを意識できた教員が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	CまたはDの場合は、改善策を検討する。	7月及び1月に調査 教員(幼、小、中、高)
2 安心・安全な学校づくり	②SNSやオンラインゲーム等での問題を家庭と共有し、聴覚に障害のある子の視点から安全にかつ情報モラルを守って使用できるよう取り組む。	○指導課	令和4年度のアンケート結果より、保護者も児童生徒もSNSやオンラインゲーム等の使用にあたり、概ね安全な使用ができたという回答が多く見られた。一方で、使用時間のコントロールが難しいことやSNSのやりとりから友人関係に支障をきたすこと、話し言葉よりも文字の視覚情報としての便利さを安易に捉え、SNSによる情報の扱いに関する意識が低いことが表面化すること等があった。一般的に示されている安全な使用、モラルを守った使用についての知識は蓄積されてきているが、実際の使用場面では生かされにくい状況を鑑み、聴覚に障害のある子の視点から丁寧な指導も必要である。家庭とも引き続き課題を共有し、児童生徒が安全でモラルに則った使用方法ができるよう指導していきたい。	【成果指標】 ・安全にインターネットを利用できるよう、保護者と連携しながら、子どもの実態を踏まえ、モラルに則った使用方法を具体的な事例や体験等を通して、指導することができた。	子どもの実態を踏まえ、モラルに則った使用方法を指導できたと思う教員が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	CまたはDの場合は、改善策を検討する。	7月及び1月に調査 教職員(小、中、高担任、寄宿舎)
			【成果指標】 使用時間のコントロールやSNSによる友人関係等について、安全でモラルを守ったインターネットの使用方法があることを学び、学んだことを意識してインターネットを使用することができた。	安全でモラルを守って、インターネットを使用することができたと思う児童生徒が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	CまたはDの場合は、改善策を検討する。	7月及び1月に調査 児童生徒(小、中、高)	
			【成果指標】 ・安全にインターネットを利用できるよう、学校と連携しながら、モラルに則った使用方法について、子どもと話し合う場面を持ち、見守ることができた。	子どもと話し合ったことが子どものインターネット使用に活かされている様子が見えた保護者が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	CまたはDの場合は、改善策を検討する。	7月及び1月に調査 保護者(小、中、高)	
3 キャリア教育の推進	③キャリア教育全体計画と個別の教育支援計画の目標を関連付け昨年度作成したキャリアパスポートを活かし個々のキャリア発達を促す。	○進路指導課	昨年度キャリアパスポートが作成され、個々で活用が始まった。保護者とは懇談の機会等を通して個別の教育支援計画と関連付けたキャリアの視点の目標や成長を共有してきた。令和4年度のアンケートより、児童生徒も自分の目標を意識し、ふりかえりにより達成されたかどうかを自身で成長を実感している発言が見られたことや、次の学期へつながる取組となったこと、また、単に進学の進路指導だけでなく、将来を見据えた指導に役立てることができたことなどの成果があった。そこで、児童生徒が令和4年度の取組を踏まえて次の学年で自分の目標や取組について考えられるよう発展的に活用していくとともに、保護者とも引き続きキャリア発達の視点からの目標や成長について共有していきたい。	【満足度指標】 キャリアパスポートの活用や授業等においてキャリア教育の視点をもって指導する。	キャリアパスポートを活用し、児童生徒と共に振り返る指導をした担任が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	CまたはDの場合は、改善策を検討する。	7月及び1月に調査 教職員(小、中、高担任)
			【成果指標】 授業やキャリアパスポートの作成及び活用を通して、キャリア教育の視点で自分の目標を意識できた。	キャリアパスポートを活用し、自分について振り返ることができた児童生徒が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	CまたはDの場合は、改善策を検討する。	7月及び1月に調査 児童生徒(小、中、高)	
			【満足度指標】 懇談等でキャリア教育の視点で子の成長が感じられた保護者が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	懇談等でキャリア教育の視点で子の成長が感じられた保護者が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	CまたはDの場合は、改善策を検討する。	7月及び1月に調査 保護者(幼)	
4 効率的、協働的業務の推進	④各課・各部の業務改善に向けて効率的、協働的業務の推進に取り組む。	○校務会	令和4年度に総務課を新設し、学校や寄宿舎の職員間で業務を協働的に進めてきた。しかしながら、各課・各部は少人数で業務を振り分けているため、偏りや時期による業務量の差が生じがちである。部を越えて課業務を複数で担うなど、一人一人の業務の負担感を軽減することや時期や量の平準化を行うことで、業務をより協働的に、効率よく進めていく必要がある。	【成果指標】 効率的に業務を遂行するために、課や部内、もしくは他の部署と協働し時期や量の平準化を行うことができた。	協働的に業務を行い、時期や量の平準化が行えたと回答した課や部が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	CまたはDの場合は、改善策を検討する。	7月及び1月に調査 各課、各部のチーフ